

友人関係初期における冗談関係の認知の役割

筑波大学大学院人間総合科学研究科 葉山 大地

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 櫻井 茂男

The roles of cognitions of joking relationship in initial stage of friendship

Daichi Hayama (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Shigeo Sakurai (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purposes of this study are to classify cognition for joking relationships (Hayama & Sakurai, 2008) into speaker and listener cognitions, and to examine the relationship between these cognitions of joking relationships and friendship patterns (Okada, 2002), interpersonal trust (Sakai, 2005), evaluations of intimacy, and closeness (Aron, Aron, & Smollan, 1992) within initial friendships (within 3 months). The participants were 263 university students (114 men, 148 women, 1 unknown). A factor analysis identified four factors; "sense of understanding friend", "sense of being accepted by friend", "sense of being understood by friend", and "sense of accepting friend". Partial correlation analysis indicates that the sense of understanding the friend is positively related to a "crowd relationship" sub-scale included on the friendship pattern scale ($r=.45, p<.01$). Apart from the sense of being accepted by the friend, the cognitions for joking relationships are positively related to intimacy and interpersonal trust. The sense of understanding the friend and the sense of being understood by the friend are positively related to closeness. These results indicate that the cognitions involved in joking relationships play significant roles during the initial stage of developing friendship.

Key words: cognitions of joking relationship, friendship, intimacy, interpersonal trust

目 的

我々は日常生活において、友人と冗談を言い合うが、全ての友人に等しく冗談を言う訳ではない。特に、冗談やからかいを言い合う関係は、「冗談関係(joking relationship)」と呼ばれる。

冗談関係は、文化人類学者である Radcliffe-Brown (1940/1952) が提唱した概念であり、主にアフリカの未開文化における特定の関係を記述するために用いたものである。Radcliffe-Brown (1940/1952) は冗談関係を「他の人を冷やかしたり、からかったりし、そのからかわれた方はそれに対して何ら立腹してはならないという二者間の関係」と定義し、親族

間で夫が妻の兄弟をひやかしたり、無礼に振る舞うことが許される社会を紹介している。

Radcliffe-Brown (1940/1952) の定義や現象は、アフリカの未開文化という限定された概念であったが、その後、冗談関係の認知は社会学においても研究対象となり、より幅広い関係を含む概念へと変容している。たとえば、Bradney (1957) は、デパートの店員を観察し、欧米社会においても冗談関係が存在し、Radcliffe-Brown (1940/1952) の報告した冗談関係より冗談の内容や形式が多様であることを指摘した。Fine (1983) も、冗談関係は親族や民族間に限らず、友人や仕事仲間の間でも頻繁に見られると述べている。上記の研究を踏まえ、Apte (1985)

は冗談関係を「お互いに特別な親族関係や他の社会的結束を認め合う二者間で起こるパターン化された遊戯的行動」と再定義している。

また、言語学においても、Norrick (1994) は、両者の間で行われる発言が遊びであるというメタコミュニケーションを共有する関係を「習慣的冗談関係」と呼び、友人間においても形成されるものであると述べている。

一方、心理学においては、葉山・櫻井 (2008a, 2008b) が関係スキーマ (relational schema; Baldwin, 1992; Planalp, 1985) の観点から、冗談関係の認知 (cognition of joking relationship) として概念化し、実証的研究を行っている。冗談関係の認知は、相手との関係を「真面目なコミュニケーションだけでなく、お互いに冗談を言い合える関係」と認知することを意味し、相手の冗談の好みを理解できているという「冗談に関する他者理解感」と冗談が行き過ぎても許してもらえるという「冗談に対する被受容感」から構成されている (葉山・櫻井, 2008a)。

冗談関係の認知に関する実証的研究として、葉山・櫻井 (2008a) は、友人に対する冗談行動への影響を検討している。その結果、他者理解感はその多くの冗談行動を促進することが明らかとなった。また、被受容感はその攻撃的な冗談行動を促進する一方で、他者高揚的冗談を言う頻度を低下させることが示された。さらに、葉山・櫻井 (2008b) は、過激な冗談の親和的意図が伝わるという話し手の期待の形成プロセスにおける冗談関係の認知の役割について検討を行っている。このように、冗談関係の認知に関して、知見が蓄積されつつあるが、検討すべき点は多く残されている。本研究では以下の2点を検討する。

1点目は、葉山・櫻井 (2008a) の提唱した「冗談関係の認知」という概念を理論的に拡張することである。冗談関係の認知は、冗談の話し手側の認知に偏っているが、冗談の話し手か聞き手かという観点から、聞き手としての冗談関係の認知も理論的に想定が可能であろう。冗談に限らず、一般的なコミュニケーションにおいて、一方の人物が常に話し手 (情報の送信者) であり続けることは少なく、時には、聞き手 (情報の受信者) になることを考慮すると、上記のような理論的な拡張は適切であり、一定の意義を有すると考えられる。

冗談に関する他者理解感や冗談に対する被受容感と対になる関係スキーマとして、聞き手としての冗談関係の認知が理論的に想定できる。すなわち、冗談に関する他者理解感と対になるものとして、自分の冗談の好みや笑いのツボが相手から理解されてい

るという「冗談に関する被理解感」が想定できる。また、冗談に対する被受容感と対になるものとして、相手の冗談が行き過ぎても許してあげるという「冗談に対する受容感」が想定できる。

2点目は、冗談関係の認知が友人関係の形成において果たす役割を検討することである。友人関係は「関係の形成・維持・深化」に分類されるが (楠見, 1988)、冗談を言い合うことは、楽しさの共有により友人関係を維持する機能を有する一方で、相手の友人との関係を形成する機能を有するのではないかと考えられる。しかしながら、友人と冗談を言い合うことは、しばしば表面的な人間関係の一つの特徴とされ、現代青年の友人関係の希薄化として論じられることが多い (千石, 1985; 岡田, 1993, 2002)。また、岡田 (2008) は、友人関係を促進する行動として、援助行動、会話の開始、自己開示、共同的問題解決を挙げ、友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルを提案しているが、「冗談を言い合う」という行動は含まれていない。我が国の友人関係に関する研究において、冗談を言い合うことは関係を進展させる上で、有効な相互作用として捉えられていないのが現状と言って良いだろう。

その一方で、冗談を言い合うことは有益な対人的機能を有するという指摘もなされている。たとえば、同一の冗談を楽しむことは仲間意識を高める (Martin, 2007)、集団の凝集性を高める (Ziv, 1984, 高下訳, 1995)、互いの心理的距離を縮める (Brown & Levinson, 1987)、という機能が指摘されている。また、Howell (1973) は、冗談関係は社会的関係における親密性 (closeness) を追求する機能を持つと論じている。友人に対して冗談関係の認知が形成されることによって、相手に対する親密さが促進される可能性が十分に想定される。

また、親密度の他に、友人関係において重要な変数として信頼感が挙げられるが、冗談関係の認知は友人に対する信頼感を促進することが予想される。水野 (2004) は、個別の友人に対する関係の変化を「信頼」を鍵概念として、面接を繰り返す手法を用いて質的に検討しており、信頼できる友人として「安心」の重要性を論じている。水野 (2004) は安心を形成する要因として「相手を理解できていること」を導出している。同様の指摘として、Rempe, Holmes & Zanna (1985) は他者を理解することを通して、未来においても支援的反応が得られるという確信が得られるため、相手に対する信頼やお互いの関係の安心感が確立されていくことを論じている。上記の知見に基づくと、冗談関係の認知に含まれる冗談に関する他者理解感、相手に対する安心へと繋がるこ

とが考えられる。すなわち、冗談に関する他者理解感が信頼感を促進することが予測されるのである。

本研究の目的は、以下の2点である。第1に、冗談関係の認知を、「話し手としての冗談関係の認知」と「聞き手としての冗談関係の認知」に分類し、それぞれ項目を作成することである。第2に、冗談関係の認知と、友人関係尺度(岡田, 2002)、友人に対する信頼感(酒井, 2005)、親密度との関連を検討する。その際、親密度の指標として、相手にどれだけ親しさを感じるかという全般的評価に加え、心理的重なり(Aron, Aron & Smollan, 1992)を検討に含める。心理的重なりは、相手への親密さの側面を測定するものと論じられている。その際、関係の初期において、特に冗談関係の認知が機能する可能性があるため、本研究は出会って3カ月以内の友人を対象とすることとする。

方 法

研究対象 大学生263名(男子114名, 女子148名, 不明1名)。平均年齢は18.45歳であった。

調査時期 2009年6月であった。

調査内容 大学入学後に会った、同性の友人を想起してもらい、以下の質問へ回答を求めた。

(a) 想起した友人との関係を問う項目：親密度を「まったく親しくない(1)」、「あまり親しくない(2)」、「どちらともいえない(3)」、「やや親しい(4)」、「きわめて親しい(5)」という5件法で回答を求めた。また、交友期間が何カ月であるのかを回答するように求めた。(b) 話し手としての冗談関係の認知に関する項目：葉山・櫻井(2008a, 2008b)の冗談関係の認知の項目を修正し、新たに「冗談に関する他者理解感」と「冗談に対する被受容感」の2側面を測定する項目を5項目ずつ作成した¹⁾。回答は、「全く当てはまらない(1)」、「あまり当てはまらない(2)」、「どちらともいえない(3)」、「やや当てはまる(4)」、「非常に当てはまる(5)」の5件法であった。(c) 聞き手としての冗談関係の認知に関する項目：話し手としての冗談関係の認知に関する項目を参考

にして、「冗談に関する被理解感」と「冗談に対する受容感」に関する項目を各5項目ずつ作成した。回答は、話し手としての冗談関係の認知と同様の5件法であった。(d) 冗談行動尺度：葉山・櫻井(2008a)が作成した尺度である(26項目)。「まったくしない(1)」～「いつもする(5)」の5件法で回答を求めた。(e) 友人関係尺度：岡田(2002)が作成した尺度であり、「非介入」(4項目)、「群れ」(4項目)、「気遣い」(2項目)の3下位尺度からなる。回答は、「まったく当てはまらない(1)」～「とても当てはまる(6)」の6件法であった。なお、群れ下位尺度に関して、「みんなで一緒にいることが多い」という項目は、特定の友人に対して尋ねる本研究の目的に不適であるため、除外した。(f) 青年期版対人的信頼感尺度：酒井(2005)が作成した尺度である(12項目)。本尺度は、「まったく当てはまらない(1)」～「非常に当てはまる(7)」の7件法である。(g) 心理的重なり尺度：Aron et al. (1992)のInclusion of Other in Self Scaleを日本語に修正したものを尺度として用いた。自己と他者の表象の重なり具合を2つの円の重なりで示した尺度である。7つの図から、自己と相手の関係を回答してもらった。

手続き 上記の質問紙を大学の講義の最後に、学生の手承を得て、実施した。

結 果

友人との交友期間 友人との交友期間を尋ねた結果、交友期間が1カ月であるものが4名、2カ月であるものが176名、3カ月であるものが62名であった。なお、交際期間が4カ月以上であった21名は、以後の分析から除外した²⁾。

関係性変数の基礎統計量 親密度、信頼感、心理的重なりの平均得点(SD)はそれぞれ3.97(0.82)、4.57(1.06)、3.63(1.72)であった。また、親密度、信頼感、心理的重なりの相関係数を算出した結果、親密度と信頼感 $r = .61$ ($p < .01$)、親密度と心理的重なり $r = .43$ ($p < .01$)、信頼感と心理的重なり $r = .41$ ($p < .01$)となった。

冗談関係の認知の因子構造 冗談関係の認知に関する項目の因子分析(主因子法, promax回転)を行った。単独因子に.40以上の負荷を示すことを基準として項目の選定を行った結果、4因子構造となった

1) 本研究で新たに冗談関係の認知の項目を作成したのは、(1) 冗談に対する他者理解感と冗談に対する被受容感の項目数の違いの大きさを解消する、(2) 冗談に関する他者理解感には「ポジティブな反応の期待」に関する項目が混在しているため、こうした項目を除外する、という理由である。新たに作成した項目は、ほぼ葉山・櫻井(2008a)の使用した項目と同様であり、概念的な違いが生じていないため、手続きは妥当であると判断される。

2) 調査対象はすべて1年次の大学生であり、調査時期が6月であるため、入学後に会った友人であれば交友期間は1カ月～3カ月の範囲を取る。

(Table 1)。第1因子は、「行き過ぎた冗談であっても〇〇は怒らないで聞いてくれる」といった項目が高い負荷を示したため、「冗談に対する被受容感（以下、被受容感と略記）」と命名した。第2因子は、「少し行き過ぎた冗談であっても私は怒らないで聞いてあげる」といった項目が高い負荷を示したため、「冗談に対する受容感（以下、受容感と略記）」と命名した。第3因子は、「どんな話題を冗談にすれば〇〇が笑うか理解できている」といった項目が高い負荷を示したため、「冗談に関する他者理解感（以下、他者理解感と略記）」と命名した。第4因子は、「〇〇は、私がどんな種類の冗談が好きか理解できている」といった項目が高い負荷を示したため、「冗談に関する被理解感（以下、被理解感と略記）」と命名した。4因子による累積寄与率は、66.80%であった。

冗談関係の認知の基礎統計量 各因子に負荷を示した項目を合算し、項目数で割った値を尺度得点とした (Table 2)。各下位尺度の内的一貫性を検討するため、 α 係数を求めた結果、 $\alpha = .83 \sim .90$ となり、十分な値を示した。冗談関係の認知に関する各下位尺度間の相関を算出した結果、全体的に中程度の正の相関 ($r = .33 \sim .61$) を示し、他者理解感と被理解感の間に比較的強い相関 ($r = .61, p < .05$) がみられた。

冗談関係の認知と冗談行動の関連 冗談関係の認知が冗談行動に及ぼす影響を明らかにするために、冗談関係の認知の各下位尺度を説明変数、冗談行動尺度の各下位尺度を基準変数とした重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った (Table 3)。

その結果、他者理解感がすべての冗談行動に対して有意な正の影響 ($\beta = .23 \sim .33, p < .05$) を示

Table 1 冗談関係の認知の因子負荷パターン (主因子法, promax 回転, $n = 242$)

	因子			
	1	2	3	4
第1因子：冗談に対する被受容感				
行き過ぎた冗談であっても〇〇は怒らないで聞いてくれる	.99	-.01	-.09	-.08
少し冗談が行き過ぎてしまっても〇〇は許してくれる	.88	-.02	.04	-.09
少し過激な冗談であっても〇〇は笑って聞き流してくれる	.77	-.01	-.05	.12
多少ひどい冗談を言ってしまうても〇〇から許してもらえる	.69	.10	.10	-.04
どんな冗談を言っても〇〇から嫌われる心配がない	.54	.07	.04	.11
第2因子：冗談に対する受容感				
少し行き過ぎた冗談であっても私は怒らないで聞いてあげる	-.01	.87	.03	-.11
〇〇の冗談が行き過ぎてしまっても私は許してあげる	.04	.87	.02	-.07
〇〇が多少ひどい冗談を言ってしまうても私は許してあげる	-.01	.82	-.04	.09
〇〇が少し過激な冗談を言っても私は笑って聞き流してあげる	.01	.77	.03	.06
〇〇がどんな冗談を言っても〇〇を嫌いになることはない	.12	.42	-.04	.22
第3因子：冗談に関する他者理解感				
〇〇がどんな種類の冗談が好きか理解できている	.02	-.03	.80	.02
どんな話題を冗談にすれば〇〇が笑うか理解できている	.07	-.12	.78	-.04
〇〇と共有している経験をネタにした冗談が言える	.07	.05	.69	-.06
〇〇の気分によって話す冗談を変えることができる	-.06	.18	.58	-.08
〇〇の笑いのツボを理解できている	-.19	.01	.53	.35
第4因子：冗談に関する被理解感				
〇〇は、私がどんな種類の冗談が好きか理解できている	-.02	.01	-.02	.85
〇〇は、私の笑いのツボを理解できている	.03	.01	-.05	.82
〇〇はどんな話題を冗談にすれば私が笑うか理解できている	-.06	.03	.09	.70
〇〇は、私の気分によって話す冗談を変えることができる	.37	-.02	-.01	.41
〇〇は、私と共有している経験をネタにした冗談が言える	.21	-.09	.25	.40
因子間相関	1	-	.50	.56
	2	-	.32	.45
	3	-	-	.67
	4	-	-	-

した。また、被受容感は、攻撃的冗談に対して有意な正の影響を示した ($\beta = .20, p < .05$)。さらに、受容感が他者高揚的冗談に対して有意な正の影響を示した ($\beta = .15, p < .05$)。被理解感は、どの冗談行動に対しても有意な影響を示さなかった。

冗談関係の認知と友人関係尺度との関連 冗談関係の認知と、友人関係尺度、親密度、信頼感、心理的重なりといった各変数との相関を求めた (Table 4)。なお、冗談関係の認知の下位尺度間に中程度の正の相関が認められたため、各下位尺度の相互の影響を取り除くため、偏相関係数も求めることとした。

その結果、被受容感は、すべての変数と有意な偏相関を示さなかった。受容感は、友人関係尺度とは

有意な偏相関を示さない一方、親密度、信頼感といった変数と有意な正の偏相関を示した。他者理解感は、友人関係尺度の群れ尺度と有意な正の偏相関を示し、親密度、信頼感、心理的重なりといった変数と有意な正の偏相関を示した。最後に、被理解感は、友人関係尺度とは有意な偏相関を示さない一方、親密度、信頼感、心理的重なりといった変数と有意な正の偏相関を示した。

考 察

本研究の目的は、出会って3カ月以内の友人関係を対象として、(1) 冗談関係の認知に関して話し手

Table 2 冗談関係の認知の基礎統計量および下位尺度間相関

	α 係数	平均値 (SD)	被受容感	受容感	理解感	被理解感
受容感	0.89	3.18 (0.72)	—	.51 **	.35 **	.57 **
被受容感	0.88	3.57 (0.82)		—	.33 **	.45 **
理解感	0.83	3.29 (0.72)			—	.61 **
被理解感	0.85	3.15 (0.69)				—

注) ** $p < .01$

Table 3 冗談関係の認知と冗談行動の関連

	日常的冗談	自己卑下的冗談	他者高揚的冗談	攻撃的冗談	自己高揚的冗談
理解感	.33 **	.23 **	.24 **	.29 **	.24 **
被受容感	—	—	—	.20 **	—
受容感	—	—	.15 **	—	—
被理解感	—	—	—	—	—
R^2	.10	.05	.09	.14	.06

注) ** $p < .01$ 注2) 表中の値は標準偏回帰係数 (β 係数) を表す。

Table 4 冗談関係の認知と友人関係尺度、親密度、信頼感、心理的重なりの相関 (偏相関)

	友人関係尺度					
	不介入	気遣い	群れ	親密度	信頼感	心理的重なり
被受容感	.08 (-.09)	.07 (.06)	.26 ** .00	.24 ** (-.09)	.42 ** (-.03)	.18 ** (-.10)
受容感	.03 (.02)	.11 (.05)	.26 ** (.06)	.35 ** (.17 **)	.45 ** (.22 **)	.25 ** (-.09)
理解感	-.08 (-.06)	.14 (-.03)	.58 ** (.45 **)	.48 ** (.22 **)	.51 ** (.21 **)	.40 ** (.19 **)
被理解感	-.05 (-.07)	.18 (.10)	.42 ** (.07)	.51 ** (.28 **)	.61 ** (.33 **)	.42 ** (.23 **)

注) ** $p < .01$

としての冗談関係の認知と聞き手としての冗談関係の認知を測定する項目を作成すること、および(2)冗談関係の認知と友人関係尺度、友人に対する信頼感、親密度、心理的重なりとの関連を検討することであった。

その結果、冗談関係の認知は想定したとおり、「冗談に対する受容感」、「冗談に対する被受容感」、「冗談に関する他者理解感」、「冗談に関する被理解感」という4因子となった。以上より、葉山・櫻井(2008a, 2008b)の提唱した冗談関係の認知の概念を理論的に拡張するという第一の目的は達成できたと判断される。冗談関係の各側面の関係に関しては、全般的に正の相関が示され、互いに関連し合っていることが示された。特に、理解感と被理解感に中程度の正の相関がみられ、自分が相手を理解できているという認知と、相手が自分を理解できているという認知は密接な関連があることが明らかとなった。

冗談行動への影響に関して、他者理解感がすべての冗談行動に正の影響を示し、被受容感が攻撃的冗談に正の影響を示すという結果が得られた。こうした結果は葉山・櫻井(2008a)と一致する。一方、被受容感から自己高揚的冗談への正の影響がみられず、葉山・櫻井(2008a)の結果は、再現されなかった。また、聞き手としての冗談関係の認知である、冗談に対する受容感から他者高揚的冗談に正の影響がみられた。この点については慎重に考察するべきであるが、他者高揚的冗談は、向社会的な特徴を有するため、共変関係がみられたと推察される。

次に、冗談関係の認知と友人関係尺度と親密度、信頼感、心理的重なりとの関連について考察する。冗談関係の認知は、友人関係尺度との間にはほとんど有意な関連がみられなかったが、他者理解感と群れ尺度のみが中程度の有意な正の相関を示した。以上から、冗談関係の認知は、岡田(1993, 2002)の論じた群れ関係と近似する関係であると位置づけられる。一方で、他の友人関係下位尺度とは有意な相関がみられず、従来型の友人関係の枠組みとは異なる側面を有する概念であることが明らかとなった。

親密度との関連では、被受容感を除き、有意な正の相関がみられた。こうした結果は冗談関係は親密性を高める機能を持つというHowell(1973)の知見と一致する。特に、被理解感と親密感にもっとも強い相関が見られ、関係の形成段階においては、相手の友人から理解されているという感覚が親密さにつながることが示唆された。一方、被受容感が有意な相関を示さなかった。相手から受容されているという感覚は、関係の形成段階ではなく、深化段階において、より大切な感覚であるかもしれない。

また、信頼感に関しても、被受容感を除き、有意な正の相関がみられた。理解感が正の相関を示した結果は、Rempel et al.(1985)や水野(2004)の知見と一致する。また、被理解感をもっとも強い相関($r = .33$)を示したことから、相手が自分の冗談の好みを知っていると認知することが、相手に対する親密さだけでなく、相手に対する信頼感につながっていくことを示している。被受容感が信頼感と無相関であった結果に関しては、信頼感の程度の観点から考察できると考えられる。すなわち、本研究は友人関係の初期段階を扱っているため、相手に対する信頼感の程度が中程度であり、こうした中程度の信頼感においては被受容感はまだ影響を及ぼさない可能性がある。より高い信頼感の形成には被受容感が一定の役割を果たすことが考えられる。

最後に、心理的重なりとの関連では、他者理解感と被理解感が正の相関を示した。心理的重なりとは、他者の見方を知り、そうした他者の見方を自己に内包する過程である(Aron et al, 1992)。相手を理解することは、相手の好み、性格、そして考え方を取り入れることを意味する。また、相手から理解されることは、自分の見方を相手が取り入れてくれることを意味する。すなわち、相手を理解する、もしくは相手から理解されることは、相手を自己に内包することを促進すると考えられる。こうした過程は、相互の自己開示によって促進されると論じられるが(Aron et al, 1992)、本研究の結果は、同様の過程が「冗談を言い合う」という過程においても存在することを示唆している。

本研究の結果により、冗談を言い合うという行動を通して、自分の冗談の好みを理解し、好みに合った冗談を言ってくれる相手に対して、親しさを感じ、信頼感を持つ一方、他者を理解することで信頼感や心理的重なりが促進されることが明らかとなった。友人関係に関する先行研究(千石, 1985; 岡田, 1993, 2002)においては、冗談を言い合うという行動は、自分の内面の開示を妨げるものとして論じられるが、関係の形成の初期においては、楽しい雰囲気を持しながら、相手への信頼感や心理的重なりを高めるといふ、一定の役割を果たしているといえる。

本研究で得られた知見は、友人関係の形成において冗談を言い合うという相互作用が重要であるという新たな視点を提示した点で、意義が大きいと考えられる。現代における友人関係を多角的に捉えるためには、これまで着目されてこなかった「冗談を言い合う」という行動に焦点を当てる必要があるだろう。友人関係における冗談関係の役割について詳細

に検討していくためには、今後、交友期間がより長い友人関係を対象として検討することが望まれる。

引用文献

- Apte, M.L. (1985). *Humor and laughter: an anthropological approach*. New York: Cornell University Press.
- Aron, A., Aron, E.N. & Smollan, D. (1992). Inclusion of other in the self scale and the structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 596-612.
- Baldwin, W.M. (1992). Relational schemas and the processing of social information. *Psychological Bulletin*, **112**, 461-484.
- Bradney, P. (1957). The joking relationship in industry. *Human Relations*, **10**, 179-187.
- Brown, P. & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universal in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 千石 保 (1985). 現代若者論：ポストモラトリアムへの模索 孔文堂
- Fine, G.A. (1983). Sociological approaches to the study of humor. In P.E. McGhee & J.H. Goldstein (Eds.), *Handbook of humor research Volume 1 Basic issues*. New York: Springer-Verlag. pp.159-182.
- 葉山大地・櫻井茂男 (2008a). 友人に対する冗談関係の認知が冗談行動へ及ぼす影響 心理学研究, **79**, 18-26.
- 葉山大地・櫻井茂男 (2008b). 過激な冗談の親和的意図が伝わるという期待の形成プロセスの検討 教育心理学研究, **56**, 23-34.
- Howell, R.W. (1973). *Teasing relationship (Addison-Wesley module in anthropology, No.46)*. New York: Addison-Wesley. pp.46-64.
- 楠見幸子 (1988). 友人関係の各位相にかかわる要因について, 日本グループ・ダイナミックス学会第 36 回大会研究発表論文集, 21-22.
- Martin, R.A. (2007). *The Psychology of Humor: Integrative Approach*. London: Elsevier Academic Press.
- 水野将樹 (2004). 青年は信頼できる友人との関係をどのように捉えているのか—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成— 教育心理学研究, **52**, 170-185.
- Norrick, N.R. (1994). Involvement and joking in conversation. *Journal of Pragmatics*, **22**, 409-430.
- 岡田 努 (1993). 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, **5**, 43-55.
- 岡田 努 (2002). 現代大学生の「ふれあい恐怖の心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究, **10**, 69-84.
- 岡田 涼 (2008). 親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築 教育心理学研究, **56**, 575-588.
- Planalp, S. (1985). Relational schemata a test of alternative forms of relational knowledge as guides to communication. *Human Communication Research*, **12**, 3-29.
- Radcliff-Brown, A.R. (1940/1952). *Structure and function in primitive society* (ラドクリフブラウン, A.R. 青柳まちこ・蒲尾正夫 (訳) 未開社会における構造と機能 (1975). 新泉社)
- Rempe, J.K., Holmes, J.G. & Zanna, M.P. (1985). Trust in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **49**, 95-112.
- 酒井 厚 (2005). 対人的信頼感の発達：児童期から青年期へ 重要な他者間で信頼すること・信頼されること 川島出版
- Ziv, A. (1984). *Personality and sense of humor* (ジップ, A. 高下保幸訳 (1995). ユーモアの心理学大修館.)

(受稿 3 月 23 日：受理 4 月 30 日)